

引詞・引句の語法  
—日本語助辞「は」の本質（二）

山内 啓介

はじめに

日本語文法の議論で、いわゆる「は」と「が」の違いを明らかにしようとして、日本語助辞「は」の本質を求めてきた<sup>1)</sup>。その「は」を日本語文法の形態<sup>2)</sup>としてみると、伝統的な用法が捉えられることがわかってきた。言い古されてきていることに改めて議論をすえると、それは前文の言葉または語句を、前提とする文あるいは文章から、文段に引く機能であることを述べようとする。

日本語の分析には形態をみて、語の成立を一覧して、その接続を明らかにする。注釈の語法から日本語に取り入れられた助辞「は」の用法について選んだ資料である文章は、言葉を引くに適応した文法性を顕著にするものを見た。また、現代文での分析の例を挙げて見たが、なお日本語助辞「は」の文法および文章法の分析は向後の課題となる。

1 「は」「が」のとらえかた

国語を文法の論理として捉えたと、わたしたちはすでに主語と述語の概念を学んできている。格助詞「が」は格機能として、近代以降の文法議論の中心にすえられ、それを主格とし、文における主語としてはたらく説明を理解することができるようになった。「が」についてはおおむねを知り、その一方で、国語助詞「は」については捉えがたいとされることが多いのは、なぜか。

日本語が言葉を学び続けてきた言語であるという仮説を筆者は持つが、その対象となった言葉は、固有語に借用した漢語であり、さらに外来語とした複数の言語である。その外来語は漢語のほかの外国語としての言語であり、いまそのひとつを共通語として学習するのは英語となった。漢語を千数百年にわたってとりいれ、英語を百数十年近く、学んできている。

徳川時代の幕末から複数の言語を学び始めた日本語は母語としての基層に、外国語を一方の規範に見て、それまで漢語だけであったものにくわえて、その層をさらに重ねることになったかのように見える。その言語を代表して英語としてみると、したがって、漢語から得た論理の規範は日本語の基層になり、その日本語は上層部に英語の上塗りをしていることになる。

日本語が日本語であるならば、言語の基層部にあっても上層部にあっても同じ言語であ

ることには違いない。和語、漢語、外来語という語種は、混在する種類の語彙をつくりはしても、いずれも日本語の語構成を見せているからである。混種語と呼ばれる語群は、「ケータイ・メール」のように、さらにカタカナ語と呼ばれる表記の分類を生み出すことにもなってきた。

その経過には、先に国語助詞「は」の捉え方について述べたように、日本語の文法のことからあたりまえのこととして、たとえていうなら、置き去りにしてきてしまったことがあると思われる。それについて、本稿は日本語文法助辞「は」の本質としての用法を具体的にし、助辞「は」の引詞、引句の用法を述べたい。なお、この用語は筆者の造語である。

## 2 先行研究

日本語文法の助詞「は」の働きに言及する先行文献から、とくに注目すべきものについて述べる。いずれも本稿の立場と研究の手法と議論の内容が、単位文を分析するという点で異なるものである。しかし、そのうちの文章にかかわる指摘が見られるので、それを二つの文献について見たい。あるいは「～は～が構文」の認知論的意味分析を説明する文献に触れたい。

まず、『「は」と「が」』（野田、1996）、第5部に、文章・談話の中の「は」と「が」に記述がある。文章・談話の最初の文について主題が決まるのは、話の現場にあるもの、聞き手の意識にあるもの、聞き手の意識にないものを、文章・談話の種類によって分けてまとめている。また、同じく、途中の文については、前に出てきたもの、また関係あるものをさす名詞としている<sup>3)</sup>。

次に、『日本語の題目文』（丹羽、2006）には、第8章引用と題目、第9章接続関係と題目に記述がある。～トハ、～トイウノハについて、捉えなおす用法を～ッテを分析して述べている。また、～ニツイテイエバの条件文が題目提示として働くことと分析をするが、仮定実現条件文としての位置づけを積極的にすすめている。そして題目になる接続関係での連続を見ようとする<sup>4)</sup>。

さらに、『「XはYが+述語形容詞」構文の認知論的意味分析』（豊地、2004）は、副題に一「花は桜がいい」構文の意味分析を中心に一とあるように、花ハ桜ダという表現のイメージを「花」の多義性と「ハナ」の概念を連想で捉えての日本語の背景にある意味分析を挙げた。日本語の話題を提示するとき起こる表現方法に意味領域を描いたものである<sup>5)</sup>。

資料『倭訓栞』について、谷川士清自筆本の影印が刊行<sup>6)</sup>された。製版本<sup>7)</sup>との違いを明らかにすることができる。大綱の文章の成立について、総論としての記述は、凡例の項目記載などから、自筆本は初稿本に近いと推定されている。

### 3 助辞「は」について

日本語文法の助辞について、この辞は語のうちで実質語である詞に対する機能語または語構成要素の接辞の形態をさすが、助辞はそのうち、おおまかに国語助詞の類のひとつとなる。辞には、国語の助動詞を含める場合があり、さらに接尾語の捉え方になるので、形態文法で広く接辞とすると、文法機能辞をさして助辞とする。助辞は主に語に下接する。

現代語で助辞の下接した語は、それで品詞となる。ワタシニ、ワタシガ、ワタシヲ、ワタシトという形態は、すべて名詞「ワタシ」である。この品詞は文中で職能を得て文の要素となる。したがって、ワタシハのように、助辞「は」が下接すると、ワタシの職能は引詞、引句の用法を担う。文の機能は、接続形式をもって示すと、・ニハ、・(が)ハ、・(ヲ)ハ、・(ト)ハとなる。

名詞に下接する助辞「は」について見ていくと、名詞のほかに動詞に下接する、また形容詞に下接にする「は」として、資料によれば、スレバ、トイウハ、ゴトキハ、オオクハ、アルイハ、トイウノハなどが分析される。その職能については文法議論を要するので詳しく論ずべきであるが、本稿では句を引用する形態のはたらきとして、まず語法を明らかにする。

### 4 資料について

資料は「倭訓栞大綱」<sup>8)</sup>の文章を選んだ。谷川士清編纂の辞書の大綱を著わした文章であり、安永4年(1775)頃に成立とされる。その四冊の刊行は明治20年(1887)になる。倭訓栞前編に、辞書の収載があると、製版本では見える。この大綱の文章は、これで日本語概説となっている。その凡例について、その前文によると、

我朝の古へハ語を眞とし主として本として字を假とし従とし末とすされハ日本紀古事記萬葉集など文字ハさまへに書たるそか中にまた意義をこめたるもあなりけりよて此書も假名をもて標出し正字をもて訓詁とすと述べる。

この凡例は、以下には7つの文章の段落を設け文段の冒頭に○を付して区別する。次は、語について述べるところである。語と、語のうちの辞と、区別を述べて、語の類別をあげる。

○我邦の語に會意あり轉注あり假借あり二合なるあり三合なるあり發語の辞あり助語の辞あり又雅語あり俗語あり雅語に讀書詞あり詠歌詞あり俗語に官府詞あり叢林詞あり雅俗ともに熟語あり縁語あり倭語に似て漢語あり韓語あり梵語あり蠻語ありこれら悉く類をもて聚めぬ

「倭訓栞大綱」の文章を、次のように見ることができる。

段落数 著者自身が丸を付けている箇所 計 165

	ただし、冒頭は前文とされ、○がない	合計 166	
文の数	文の定義によっては句ともなりうる	計 1,372	
	ただし、漢文書きは引用に含める場合があるので、厳密にはカウントしない		
助辞「は」を用いる文の数	1文に複数回の出現については1とする	計 734	
形態数	活用しない形態プラス助辞「は」	計 594	形態の出現、延べ
	活用する形態プラス助辞「は」	計 420	形態の出現、延べ

具体的には、上記の二つの文段を例にして述べる。それぞれの文の集合に、単位文を分析すると、3文かまたは4文と、20文とになる。文のあとに／を入れて示した。そして、助辞「は」を下接する語に下線を施した。次の凡例の冒頭文は3文に分けた例である。

我朝の古へハ語を眞とし主として本として字を假とし従とし末とす／されハ日本紀古事記萬葉集など文字ハさまへに書たるそか中にまた意義をこめたるもあなりけり／よて此書も假名をもて標出し正字をもて訓詁とす／

この第2文には「されハ」が見え、活用語にはたらくと捉えることができる。したがって、この文段は「古へは」「されは」「文字は」と、3つの語を形態として数えることになる。古い時代には、我が国に語と字があり、その文字には書きざまがあり、意義があると、それで仮名の標出をして正しい言葉の解説をしたと書き始めている。次は、凡例の○がついた4つめの文段である。

我邦の語に會意あり／轉注あり／假借あり／二合なるあり／三合なるあり／發語の辞あり／助語の辞あり／又雅語あり／俗語あり／雅語に讀書詞あり／詠歌詞あり／俗語に官府詞あり／叢林詞あり／雅俗ともに熟語あり／縁語あり／倭語に似て漢語あり／韓語あり／梵語あり／蠻語あり／これら悉く類をもて聚めぬ／

この文段を単位に分けて20文とすることには、文とは何かを定義することにより異論が予想され、文についての議論が必要である。その議論の分析を受けて文の下位に句を設けることも可能である。本稿では文段を文章単位とし、文が集まる文章において、便宜、上記のように区切りを用いることにする。これは、形態から語の成立を見て、統語分析をする課題となろう。

資料に取り上げる文章は、その時代をもつ。時代とは漢文訓読語を経て、著者の倭訓を定めようとする日本語の時代である。上記の文章を資料にみて、日本語助辞「は」の語法を分析すると、漢文訓読の語法の影響下にあることが判然する。しかし、それはまた日本語文法の時代性でもある。「倭訓栞大綱」について、日本語助辞「は」の用法を、次に概観する。

## 5 倭訓栞大綱の文章分析

まず形態を抽出すると、次のようである。各段に助辞「は」がつく語をみる。大綱前文の例をまず示す。これを第1段とした。そして、4文にわけた。ここには、助辞「は」3

つが見える。表記に「ハ」字を用いる場合が多く見える。

- 1 古人ハ開合正しく言に隨て其義も亦明らかなれハ別に倭語の學を立さるにや
- 2 音博士などいへるも漢音吳音のわいだめ其訛謬を正すのみにそ有ける
- 3 天平の時に至り右大臣吉備ノ朝臣音韻の學に長せし事善相公の封事に見え悉曇の傳は釋ノ圖仁入唐して南天の寶月三藏より得たる事三代實録に見えたり
- 4 悉曇翻して成就とす 一切の言文字によりて成就の義也

この例から、「古人ハ」「明らかなれハ」「悉曇の傳は」をそれぞれ形態として分類する。しかし、次の第2段のように、助辞「は」を見ない文段もまれにある。この8文を見ると、日本語文章の論理展開を示す文の連続が「～に～あり」「～に～を～といふ」の構造であることがわかる。

- 5 凡天下の言に古言あり今言あり
- 6 其古今の言に方言あり
- 7 方言の中にまた各雅言あり俗言あり
- 8 古言の雅なる後の俗言となるあり
- 9 古言の俗なる後の雅言となるあり
- 10 爾雅に古言今言其異あるをときて釋詁といひ古今の間四方の言よく通する事なきを解きて釋言といふ
- 11 千載の下に生れて千載の上に通し一方の内に在て四方の外に達しなん
- 12 難きこといふへからすといへり(伴信友云、大綱は此條をはじめ多くは新井氏の東雅の説をとれり)

続けて、第3段を挙げておく。8文で構成される。

- 13 西方諸國のこときは方俗音韻を尚ひて文字のこときは尚ふ所にあらず
- 14 僅に三十餘字をもて天下の事を盡しぬれば其聲音もまた多からざる事を得へからす
- 15 漢土のこときは其尚ふ所文字にありて音韻の學のこときは西方の長しぬるに及ハす
- 16 我東方の如きは其尚ふ所言詞の間にありて文字音韻の學は尚ふところにしもあらず
- 17 されは天地の間本自ら方言あり
- 18 我東方の聲音のすくなき其聲音のすくなきにあらず
- 19 たゞ是天地發聲の音にして天下の音を合せて其中にあらずといふものなし
- 20 されと凡言詞の間聲音の相成す所にあらずといふものなけれハ我国古今の言に相通せんは音韻の學によらずしてまた他に求へしともおもはれすといへり

## 6 活用しない形態につく助辞「は」

全166段に見える形態を次に一覧する。活用しない形態につく助辞「は」を、出現順に挙げてある。名詞または名詞相当の語となるものがほとんどである。その語の内容をわかりやすくするために、詞としての扱いを連語の形式、あるいは句の形式で示すものがあ

る。また、表記上の注意をカッコ内に筆者注として、文字構成、ママとなるルビなどを加えた。語群の数字は段数の通し番号を表す。

番号が不連続であるのは、該当の用例が見られない文段があるからである。

[助辞「は」の形態]

1 古人ハ 悉曇の傳ハ 3 文字音韻の學ハ 4 文字ハ 書ハ 5 西土ハ 我邦ハ 韻語ハ 訓語ハ 訓語ハ 7 やまと歌ハ 人の心ものに感せさるほとは まことハ は まことは 日本紀には 中世の言ハ 下世の言ハ 9 歌ハ 萬葉集には 歌ハ 倭歌ハ 陀羅尼ハ 10 我が國の言ハ 主ハ 11 文章を口語とのわかちハ 音讀と訓讀とのわかちハ 策稱ハ 諡稱ハ 12 古事記ハ 日本紀萬葉集和名鈔等ハ 日本紀古事記及令式等は おちつかたハ 13 古事記ハ おにハ 大(オホ一振り仮名、以下同じ)にハ 女姫などのめにハ 妹のものにハ 神のみにハ 子には 木城(キ)にハ 火にハ 戸にハ 伎比登などハ かゝる類ハ 16 今の本草字書にハ 此食經ハ かの邦にハ 崔禹錫ハ 17 倭名鈔にハ 倭名抄には 日本紀に見えし所ハ 倭名抄に見えし所ハ 此等の類ハ 18 もりハ 社地にハ 鏡ハ 梓ハ 風土記にハ 姓氏にてハ 通俗には 梶ハ 五韻類聚に○(手偏に、上、下)ハ 蝦夷ノ島松前にハ 字書に猜ハ 匂ハ 鞆ハ ○(衣偏に、畢)ハ 襜ハ 楡ハ ○(獸偏に、葛)ハ 19 本書にハ 日本紀にハ 一説にハ 梅と梅ハ 云ものハ ○(魚偏に、宣)ハ 20 草にハ 木にハ 鳥にハ 魚にハ 21 地名にては 朝那ハ 朱提ハ 須句ハ 山部ハ 穂の郡を寶○(食偏に、天)とするの類ハ 23 はしり書とハ はなち書ハ みゝず書ハ ふちの花がきつのはがきハ 25 一概にハ 西土の言語ハ 日本の言語ハ 27 諸越にハ くはふめしなせあんずるなどハ 28 べるう國ハ 此外ハ 最初ハ 事は 29 草ハ いろは假字ハ いろは假字ハ 元の巴思八とハ 旁假字ハ 31 假名の字ハ 假名の字體ハ 32 萬葉集にハ 者ハ 33 ヒハ ヌハ 35 平書とハ 關字とハ 37 正訓ハ 義訓ハ 萬葉集には 38 それは 萬葉集の書體ハ 39 かなつかひを後世の事といへる説ハ 五十音及いろはハ かなつかひにハ やまちへハ いまハ 同字にハ 40 又は 41 歌ハ 42 于句ハ 45 ねてもハ じハ 假名ハ 本濁ハ 新濁ハ 47 田舎ことばにハ 48 遠江にては 三河碧海ノ郡ハ 49 田舎詞ハ 人の子ハ ものは 鶯ハ 音をは 關東の鶯ハ 山にてハ 西土の鶯ハ これハ 51 訓をハ 52 一字ハ 一字ハ 小角ハ 虎耳ハ 知風草ハ 53 詞ハ 古へハ げすの詞にハ 54 ひなにハ 上総にてハ けゑへハ ちふハ わこらハ ゑずらしやハ ぜじやうハ しやうちくは よんべハ きたちゝハ ちゝハ うらハ やれハ けうとなハ かつてこいハ さすがハ おぞがひハ おぞいことハ なにハ あらずにハ そうでやかうでやハ きふハ みんしひハ くいしいハ うどうハ どうしやうハ おむひハ わりうハ おむひハ しょうろハ あふえじハ なんじやりハ いきつちまハ きつちまハ ぐはらりととさいたハ をけとちのかばとハ 桶ハ 琉球の歌ハ 春正ハ けふのふくらしやハ なにもがなたちよるハ つぷてをるはなのハ つゆぎやあたくとハ びるしやハ かもものかげハ もころ

してハ ちつぼハ 55 供僧ハ さるを後にハ 二荒山ハ 比叡ハ 56 御門も音にて  
 は もちひハ 魚ハ 鹿ハ 狐ハ 58 ふるまひハ 61 てにをはの所詮は てには、  
 鳥ハ 歌ハ 63 過去ハ 未來ハ 現在は 下知ハ ゆくきたるハ ゆけきたれハ  
 66 直讀すべき所にハ 反讀すべき所にハ レハ 67 一字再讀のものハ 盃ハ 諸ハ  
 通志略にハ 者ハ 與ハ 68 半濁には 濁音にハ 69 點法ハ 實ハ 點といふもの  
 ハ 點法ハ 70 ふた歌ハ 難波津の歌ハ 安積山の歌ハ 王人ハ 采女ハ 生とし生  
 けるものにハ 今の代ハ いろハ 是ハ 其代には 71 思裳保湯留などの類ハ 73  
 此五位十行の圖ハ 詳なる事ハ 74 あいうえを等の五十字ハ 75 悉曇にハ 南天  
 ハ 中天ハ 76 きえ反けしか反さの類ハ 77 あいうえをの響ハ あかさたなはま  
 やらわの十位ハ いきしちにひみりゐの十位ハ あよりは かよりハ つけがたきハ  
 あかさたなはまやらわの十位ハ いうえをの四の横行ハ 78 實ハ こハ 涅槃經にハ  
 西域記莊嚴經などには 79 いえハ あいうえをのうハ わゑおのうハ 80 五十音  
 ハ 涅槃經の十四音ハ 倭音とは 81 五十字音ハ 十四ハ 音を生ずる始めハ あハ  
 82 口語のまあやあの類ハ かさたなはまやらわの下にいふあの音ハ 呼喚ハ 嘯喚ハ  
 此二つの外にハ 83 らりるれろの五音にハ 此行の音にてハ 84 下にある時は 其  
 外ハ 85 あいうえをハ 和ノ行とハ 八行とは 和の行ハ 和の行の尾のおハ 86  
 五字ハ いハ 字音にハ えハ やハ 阿波の國人ハ 男ハ 女ハ をハ 口語にハ  
 薩摩人ハ 加賀人ハ 關東にてハ 87 はひふへほの一行にハ 餘りハ 88 味のゑぐ  
 きハ 吳音にてハ 漢音にてハ 吳音にてハ 漢音にてハ 廻ハ 89 活用する時ハ  
 91 わハ 92 南朝の明魏法師ハ 是ハ 93 いえをは ゑゑおハ 假字使ハ 93 き  
 にかよふへき所ハ ふにかよふへき所ハ へとひとにかよふ所及入聲字の音の下ハ 96  
 出雲人は 安藝人ハ 志摩の國安乘(アノリ)の俗ハ 上總國の南の方の人は 97 あ  
 の行とわの行とは 98 あとかとは 98 をにのしこくさといふ時ハ みやまをろしハ  
 君をハもふ荷をハもみなどハ おとこといふおハ をんなといふをハ 是ハ 鬼ハ  
 おろしハ おほつといふ時ハ おほ山といふ時ハ おほ野といふ時ハ 例ハ 100 この  
 外ハ 101 轉用ハ 雅言にハ 102 假字書には 入聲のつハ 104 言語の中にある時  
 ハ 105 はハ 106 あハ むハ 摩多體文の圖にハ うんむの三字ハ 咩ハ 正音ハ  
 107 鼻ハ 108 んハ 上代にハ 109 うまうめうもれ木などハ 110 んハ む字ハ  
 ん字ハ 大日經疏などにハ 111 ん字ハ ん字ン字ハ 113 和語ハ 第五にあたる詞  
 ハ 詠歌読書にハ 114 十音ハ 活用する時ハ かハんたハんなどいふ時ハ 115 第  
 二位ハ 第三位ハ 横ハ 116 横行ハ ねさめぬきえぬハ 歌にハ かハんは たハん  
 ハ かハぬといふ時ハ たハぬといふ時ハ かきぬといふ時ハ たちぬといふ時ハ か  
 くとつなといふ時ハ かハんたハんハ かくたつハ 是等は 餘ハ 117 響きある音  
 ハ 118 第二位と第四位との音ハ 切(ツマ)る語ハ 119 目ハ 上(ウエ)のうハ  
 120 平上去入の四聲ハ 灰の韻ハ 豪の韻ハ 121 倭音の假字ハ 122 一ハ 四ハ  
 五ハ 二三の時は のをとの三音ハ 一ハ むみふの三音ハ 二三の時ハ 四ハ二にか

よふハ 五ハ三にかよふハ 引ハはねハ はぬるハはぬるハ 三字中略ハ 123 是ハ  
 唐土ハ 和國ハ 呂ハ 律ハ 呂ハ 律ハ 124 羽たる文字入聲の文字の書きにくきな  
 とをハ 萬葉には 古今の序には 125 のべことハ、 つづめことハ、 其實ハ 126  
 みらくハ みえんハ みせんハ みなくハ 127 なりけるハ ざりけるハ 矢瀬の女ハ  
 京都の人は 尾張の人ハ 江戸の人ハ 129 歸喟鬼貴の類にハ 源氏變化の類にハ 虜  
 ハ 今の世ハ 130 なにねねのゝ行まみむめもの行にハ 反音鈔にハ 132 此五字の  
 韻となる字ハ 133 南音ハ 八音ハ はねる音の文字の下ハ つむる音の下にてハ  
 134 屬く時ハ 135 そハ せいハ さいハ 139 水ハ 笏ハ 尺とハ 尺ハ 141  
 字音のかなハ 訓のかなハ 142 字音ハ 143 音の假名ハ 是ハ 歌書物語などにハ  
 法師ハ 鸚鵡ハ 芭蕉ハ 144 こハ 145 數字ハ 字ハ 字ハ 字ハ 以衣ハ 爲悪  
 ハ をハ おハ 意ハ 今ハ 二字ハ 会合の別にハ 146 烏ハ 都ハ 淮ハ 147  
 儒典ハ 梵書ハ 讀書の時ハ 五音ハ 吳音ハ 南音轉音などの時ハ 八音納音などの  
 時ハ 148 漢吳ハ 儒道佛道のときハ 神道の時ハ 唐音ハ 149 類ハ 其字ハ 150  
 圈點せる者ハ 古事記にハ 入聲ハ 橋ハ 端ハ 箸ハ 151 去ハ 152 ゆゑハ 此  
 方の語ハ 差別ハ 153 鴨ハ 鴨川といふ時ハ 鴨社といふ時ハ 雲ハ 音の變る所に  
 てハ 註すへき所ハ 154 對馬貢銀記にハ 尼ハ 古事記にハ 此時の音ハ 王仁ハ  
 漢音ハ 正史にハ 155 漢音ハ 吳音ハ ゆゑハ 始めハ 漢音ハ 我國史には さま  
 みにハ 吳ハ 西朝には 吳とは 是ハ 宋ハ 吳とは 隋ハ 前漢ハ 後漢ハ 中原の  
 正音とは 156 唐音ハ 實ハ 吳音の外ハ 吳音にハ 唐音にハ 漢音にハ 宋音にハ  
 吳音には 漢音唐音にハ 宋音には 此集ハ 天台にハ 眞言には 禪家には 律宗に  
 には 漳州音には 東寺にハ 山門にハ よむ事ハ 實にハ 此國にてハ 157 漢音吳音  
 には 今の音とハ 158 漢音ハ 唐音ハ 懺法の音ハ 承習するものハ 漢音ハ 漢音  
 唐音ハ 唐音にハ ぐゑんじふえいくゑハ げんじへいけハ 天竺の彦底多聲ハ 蘇漫  
 多聲ハ 提の類ハ 漢音ハ 唐音ハ 畢竟ハ 漢ノ正音ハ 漢ノ俗音ハ 吳音ハ 和音  
 ハ 159 唐音ハ 南京ハ 正き事ハ 實ハ 160 和語ハ 漢字ハ 161 伎ハ 美ハ  
 此の例ありし事は 日本紀には 161 讓ハ 163 吳音ハ キエオ三音ハ 舊音には  
 164 佛經ハ 儒道兩典ハ 本朝語園には 166 あいうえをハ かきくけこハ さしす  
 せそハ たちつてとハ なにぬねのハ はひふへほハ まみむめもハ やいゆえよハ  
 らりるれろハ わゐうゑおハ 五十字ハ 此書ハ (以上、166段)

## 7 活用する形態につく助辞「は」

活用する形態は、いわゆる動詞、形容詞などである。接続する語形は、サラバ、サレバ、  
 サルハなど、ゴトキハ、オオクハなど、接続形式によって、条件文となったりする。その  
 出現を文の形式で数えると、349文であった。活用しない形態の出現文は、467文である。  
 助辞「ハ」が出現する文の総数は、先にあげたように、734文であった。次は、出現の例

である。

西方諸國のこときは 文字のこときは 漢土のこときは

音韻の學のこときは 我東方の如きは

されは天地の間本自ら方言あり

凡言詞の間聲音の相成す所にあらずといふものなけれハ

我国古今の言に相通せんは音韻の學によらずしてまた他に求へしともおもはれずといへり

音文の二に就ていハ凡そ人生れて言ハさるハなし

言ハ自ら聲音存す

見聞のニツに就ていは聞の義博し遠し

されハ我邦神徳君徳を稱して聞といへるもの多く聰明叡智を謂て八耳といへり

聞てすなはち識さる事なきハ言語の徳也

以上の例に、「ごときは」「されは」「なけれハ」「相通せんは」「いハ」「言ハさるハ」「言ハハ」「されハ」「なきハ」が見える。この挙例で、「言う」という語になる形態が多いのがわかる。その用法で顕著なのは、～トイウハ形式になる語法である。活用する形態につく助辞「は」の例のうち、資料から「言う」について用例<sup>9)</sup>を一覧する。

〔動詞「言う」と助辞「は」形態一覧〕

- 1 音文の二に就ていハ凡そ人生れて言ハさるハなし 8 ページ
- 2 言ハ自ら聲音存す 8 ページ
- 3 見聞のニツに就ていは聞の義博し遠し 8 ページ
- 4 種といひ葉といふは皆たとひ也 10 ページ
- 5 是を略していひしにはあらず 10 ページ
- 6 其略していふは其花既に飛て纒に残れる也といへり (信友云譬喩妙) 11 ページ
- 7 又[畑]とも云ハ[火田]を合したる也
- 8 元亨釋書にも梅ノ尾と書し湖海新聞にも梅為木母といへは梅に同じ 18 ページ
- 9 やがてを鱧と言は延喜式に見え 19 ページ
- 10 松下氏の説に今西國の人文字の異体を謂て肥後字を書といふといへれハ弘法より已前に假名の字體ハありしにやいふかし 24 ページ
- 11 世にひとつ書といふハ條を分ち目を立る時に一云々一云々と掲書するをいふ 26 ページ
- 12 伊呂波の文字にて書を萬葉書といふハ誤也 27 ページ
- 13 梅村載筆に此古今集の歌を擧て長嘯惺齋など辯へ得られきるよしをいへるハよく古書を読さるの誤なるへし 27 ページ
- 14 水鳥の鴨飛鳥の明日香白鳥の鷺坂山などいへるハまた一格也 28 ページ
- 15 やうなりといへるハ是也 28 ページ
- 16 四國にてばかりをばとのみいひ 美濃三河にてさまをさとのみいふハ略音也 30 ページ

ジ

- 17 寐るをぬるといふハ上略也 31 ページ
- 18 てにをはをてにはといふハ中略也 31 ページ
- 19 あれをあとといふハ下略也といへり 31 ページ
- 20 ゆとうよみといふハ湯桶の字一字ハ訓一字ハ音なるをいへり 32 ページ
- 21 文字よみといふは石竹をいしたけ海松をうみまつ龍眼をたつのめ龍膽草をたつのいぐさとよみ小角はくだのふえなるををつのふえとよみ虎耳はゆきのしたなるをとらのみとよみ知風草はちからぐさなるをかざしりぐさとよむの類是也 32 ページ
- ジ
- 22 亦かうするなといふハ後を制する詞なせかうするといふは今を答むる詞なるを上総にてはかうするなといふをなせかうするといふハ語脈の異也 33 ページ
- 23 鈴を音にりんといへば打べく訓にてすゞといへば振へし 36 ページ
- 24 干物を音にかんぶつといへハ精進の名詞にてひものといへハ魚類の稱也 37 ページ
- 25 右の讀法を名けておことハといふハ點法多き内の言をもてよべる也 39 ページ
- 26 てにをはといふは右にをことは左に爾かてとあるを平上去入の點法の如くにして四隅を左旋りによむ也 39 ページ
- 27 或説に出葉の義といへるは腹を捧ゆへし 39 ページ
- 28 くぬちとよみて國中をいへるハにう反ぬなるゆゑ也 48 ページ
- 29 あと答ふるは禁秘抄に見えて今あといひあいといふハ其詳なる也 49 ページ
- 30 うといふハ下さまへ答ふる辭 49 ページ
- 31 岡部氏の説にかさはの四行の濁音にかきくけこをらりるれろもていへるハ刺をいかといふハ苛をいらといふに同し 50 ページ
- 32 さしすせををなにねねのもていへるハいざといなと通ひしらじをしらにみずをみぬはせとはねとこせとこねとの類也 50 ページ
- 33 たちつても亦なにぬねのに通ハしいふハ鍛をかたしといふハかなしの義 50 ページ
- 34 はひふへほをまみむめもにていふハ日本紀の歌に婆と書へきを麻麼磨など填たり 50 ページ
- 35 又われをわえといへはらりるれろも正音ならず 53 ページ
- 36 あの行と和の行とは首尾に居て相通へるか中に織絹をありきぬとよみ愛宕をあたごともおたぎともいひ戦慄ををのくともわなくともよみ誘をわかづるともをこつるとも婦人をたをやめともたわやめとも撓をとをともたわとも叫ををめぐともわめくともいふは隅違に通へり 53 ページ
- 37 犬をいぬともゑぬともいひ息をいきともおきともいひ居ををるともゐるともいへるは相通へるにあらて別の義なるにや 53 ページ
- 38 おにとはかりいへハ重きゆゑにおと書 54 ページ
- 39 歌に上にそといへは下必ず第三の韻にてとまり上にこそといへは下必ず第四の韻に

- てとまるハ自然の妙なるべし 54 ページ
- 40 音便にてにをんといへるハなんぞいかんぞいつくんぞゆるんなかんづくの類也 58 ページ
- 41 りをんといへるハ酉時をとんるとき足ぬをたんぬ件をくたん盛りをさかん了りをを  
はんぬ歸をかへんなんとよめる類是也 58 ページ
- 42 錢をせにといひ蘭をらにといひ縁又宴をえにといひ紫苑をしをにといふハはぬる音  
をおさへて和語とせしもの也 58 ページ
- 43 假令はかきくけこを書にていへハかきといふハ未定の辭也 58 ページ
- 44 かくといふハ已定の辭也 58 ページ
- 45 かけといふハ人に令するの語也 58 ページ
- 46 かこといふハ自ら爲の辭也 58 ページ
- 47 たちつてとを立にていへハたちといふハ未定たつといふハ已定たてといふハ人に告  
るたとといふハ自ら言へる也 59 ページ
- 48 そか中にかこたとなどといふハ第五にあたる詞ハ雅語にあらず 59 ページ
- 49 たとへば扇をあふぎといふハあふぐの義度をさしといふハさすの義大刀をたちとい  
ふハたつの義網をあみといふハあむの義剪刀をはさみといふハはさむの義怒をいかり  
といふハいかるの義の類 59 ページ
- 50 さて音韻の序てをもていはゝかゝんは將書の義也 60 ページ
- 51 合音といふハあんあうあふあつあくなといふ西土の字音の如き是也といへ 62 ページ
- 52 和國は單律の國にて呂の音なしといへるハ心得かたし 62 ページ
- 52 假令ハあはうみをあふみといふハはうを反しふとなる也 63 ページ
- 53 とほつあふみをとほたふみといふハはつあを反したとなるなり 63 ページ
- 54 よて強ていへハ皆たちつてとはひふへほの濁音となれり 65 ページ
- 55 ふつくちき]に平字なしといふハ此五字の韻となる字ハ皆入聲の音なればかくいひな  
らへる也 65 ページ
- 56 連聲といふハよみつゞきにて音を變する也 65 ページ
- 57 よみくせといふハ正音に非されとも言便にしたかひて變し傳ふるあるをいへり  
67 ページ
- 58 仁壽殿をじんうてんといひ達智門をだていもんといふハ埃囊抄に見えたり 68 ペ  
ージ
- 59 世に儒典ハ漢音を用み梵書ハ吳音を用うといへるハ心得かたし 69 ページ
- 60 名分等分なといふハ分ノ字濁音也 70 ページ
- 61 よて西土の音にていへハ此方の語は総て入聲の如し
- 62 松下氏の説に菟道ノ雅郎子(ワカイラツコー振り仮名ママ)師王仁習諸ノ典籍是漢音  
之始也といへるハ心得かたし 73 ページ
- 63 況んや後漢倭傳に自武帝滅朝鮮使驛通於漢者二十許國國々皆稱主といへるハ國造縣

主などの私に通せしもの 74 ページ

64 その上吳もと南方荆蠻の國邊土の音なれば刊誤にも吳民之言如病○風而禁ともいひ馬伯庸も四方偏氣之語不相通曉惟中原漢音四方可以通行といへれハもはら漢音を習ハしめられたると見えたり 74 ページ (○は、「言」にやまいだれ)

65 是をもて今の漢音は全く和讀として中華に此音なしといふは」謬れり 76 ページ

66 今もはら唐音といふは吾國より中華に使せし事六朝にもありといへとも唐の代に當り殊に頻々たりしをもて也 77 ページ

67 もとより漢に在てハ漢唐に在ては唐音宋に在てハ宋音なれハ漢音唐音は一也とすへけれと唐音といふハ通俗の音也 77 ページ

68 されハ老學菴も語音之正取之中原中原惟洛陽然四方豈不正哉中就其多分耳といへハ中華の語音ともに雅俗ある率も知ぬへし 77 ページ

69 唐音は近代に及び取用うる事多しと云るハ信に信すへし 78 ページ

70 和韻五十字ハ此中國品より略出せしといふ事此書は藏外傳來の本也といふは常州月山寺邦敬の悉談章に見えたり 80 ページ (70 文 89 例)

## 8 日本語助辞「は」の語法

用例を見てきたように、助辞「は」に引かれた語句は、詞また詞に相当する語であり、文を関係構成する句でもある。一覧でわかるように、語として成立する。引用の方法が明らかになるのは、文を捉えると、文の複数にわたる語と語との関係が成り立つことである。その文章が意味するところは議論のための語句の注釈にあったのは、この資料性によるところが大きい。それについて、文例を挙げておく。

一語多義にわたり一句数意を兼るは倭語の妙也 よて古事記日本紀にも歌ハ皆字音のみを用られたり 萬葉集には字義を兼て取れるをもて種々の書體を立られたり 歌はうたふの義 聲に發して聞を要とす 詩のこことく文字韻律をもて主とすへからされは也 西土にて我邦の歌を記せしもまた字音をもて記して釋音切意など附註し其義を明せし事見えたり されは无住法師も倭歌ハ此國の陀羅尼也といひき 陀羅尼はもとより諷詠すへきものにて其用聲音にあり 又總持多含の義あるをもていへる成へし

(第9段)

## 9 現代文の分析例<sup>10)</sup>

日本語助辞「は」の語法解として、現代語文章の例を示そう。その手順は上記の応用となる。①日本語助辞「は」を含む文を単位文に分ける。②文における語と語との関係を文の要素で見て、「～は」の働きを格関係に分析する。③文と文とが連続する文章単位で「～

は」の引用を解釈する。④「～は」が前文の語また語句を受けて表現内容を展開している。  
⑤全文を受ける、また前段の内容を受けている用法に注目して、文章のテーマを分析する。

例題に、新聞記事のコラムから、次の文章<sup>11)</sup>を分析する。

総字数 660 字      句点数 16 か所      読点数 5 か所      一文平均 44 字  
段落数 6 つ      一段落平均 110 字      2.5 文

例文：

「Vocuri」とは17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ」の表記である。語釈には「ある所まで人に付き添っていくこと」と並んで「埋葬」とある。そして「送りをする」「送りに参る」の用例がある▲二つの用例はそれぞれ「埋葬する」「葬式に行く」と説明されている。旅立つ人に途中まで付き添っていく「送る」という言葉を、古くから死者を葬るのに用いた日本人だ。その死生観はポルトガルの宣教師たちの関心を引いたに違いない▲死者の納棺を職業に選んだ主人公を描く滝田洋二郎監督の映画「おくりびと」が米アカデミー賞外国語映画賞を日本作品として初受賞した。日本人の死生観、人のきずなを描いた映像の力が、宗教や文化の違いを超えて人の心をつかんだのだ▲アカデミー賞は主にハリウッドの映画関係者によって選ばれるという。すでに内外の映画賞や映画祭グランプリに輝いてきた「おくりびと」だ。しかし常に国境を越えた世界相手の映像作りに挑む映画人からの高い評価はまた格別であろう▲生と死といった日本人の心の最深部に表現のおもりを垂らすことで、かえって世界中の人に通じる感動の鉱脈を掘り当てることもあるのが芸術である。同じようなことは、お家芸のアニメ「つみきのいえ」で短編アニメーション賞を初受賞した加藤久生夫監督にもいえるに違いない▲「映画は言葉を超えることを実感した」という滝田監督。「ありがとう、アニメ」と語る加藤監督である。その映像にひそむパワーを世界に向けて解き放つのは、作り手の「独創性」であることを改めて示してくれた両受賞作だった。

文章に見られる「は」は次のようにマークできる。日本語助辞「は」は引言語、語句を示している用法をみるので、それを以下に分析する。

- 1 「Vocuri」とは17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ」の表記である。
- 2 語釈には「ある所まで人に付き添っていくこと」と並んで「埋葬」とある。
- 3 そして「送りをする」「送りに参る」の用例がある。
- 4 二つの用例はそれぞれ「埋葬する」「葬式に行く」と説明されている。
- 5 旅立つ人に途中まで付き添っていく「送る」という言葉を、古くから死者を葬るのに用いた日本人だ。
- 6 その死生観はポルトガルの宣教師たちの関心を引いたに違いない。
- 7 死者の納棺を職業に選んだ主人公を描く滝田洋二郎監督の映画「おくりびと」が米アカデミー賞外国語映画賞を日本作品として初受賞した。

- 8 日本人の死生観、人のきずなを描いた映像の力が、宗教や文化の違いを超えて人の心をつかんだのだ。
- 9 アカデミー賞は主にハリウッドの映画関係者によって選ばれるという。
- 10 すでに内外の映画賞や映画祭グランプリに輝いてきた「おくりびと」だ。
- 11 しかし常に国境を越えた世界相手の映像作りに挑む映画人からの高い評価はまた格別であろう。
- 12 生と死といった日本人の心の最深部に表現のおもりを垂らすことで、かえって世界中の人に通じる感動の脈を掘り当てることもあるのが芸術である。
- 13 同じようなことは、お家芸のアニメ「つみきのいえ」で短編アニメーション賞を初受賞した加藤久生夫監督にもいえるに違いない。
- 14 「映画は言葉を超えることを実感した」という滝田監督。
- 15 「ありがとう、アニメ」と語る加藤監督である。
- 16 その映像にひそむパワーを世界に向けて解き放つのは、作り手の「独創性」であることを改めて示してくれた両受賞作だった。

「は」の用例は9か所、ある。

例1 「Vocuri」とは17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ」の表記である。

この例文を例1として、変換すると次のようになる。

例1 「Vocuri」とは17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ」の表記である。

→1' 17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ」の表記は、「Vocuri」である。

例1は、日葡辞書にある語項目を、「～とは～である」のように「と」で表す。引用をしているので、そのままに「～とは」が「～は」であっても文表現は成立する。文の意味が次のように、「Vocuri は、表記である」、「表記は、Vocuri である」を可能にしているためである。

⇔1" 「Vocuri」は、17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ」の表記である。

「Vocuri」の語を辞書に見出したという、書き手が話題を提供しているのであるが、文の表現では、次のように書かれるところだろう。

→17世紀初めのポルトガル語による日本語辞典「日葡辞書」にある「ヲクリ」の表記に「Vocuri」と見える。

引用の語を示す場合に、「～と」を用い、指示を明確にして「～とは」を用いている。以下に、例文を順次見ていく。

例2 語釈には「ある所まで人に付き添っていくこと」と並んで「埋葬」とある。

→2' 語釈は、「ある所まで人に付き添っていくこと」と並んで「埋葬」とある。

→2” 語釈に「ある所まで人に付き添っていくこと」と並んで「埋葬」とある。

この変換で注意すると、例2の「～には」の用法が「～についていえば」となる。語釈の内容を読み、その中にあるものを示しているの、厳密には、2”の「～に～がある」の用法に通う表現と異なるとみることができる。

例3 二つの用例はそれぞれ「埋葬する」「葬式に行く」と説明されている。

前段落で、「送りをする」「送りに参る」の用例を示しているの、それを指示して、「二つの用例」とまとめて表現し、引用している。「埋葬する」「葬式に行く」という説明は、「送る」が、葬送の意味であることをいう。

例4 その死生観はポルトガルの宣教師たちの関心を引いたに違いない。

葬ることを、送ることとした表現に、当時の人々そして現代の私たちも同様であると、そこに死生観があると筆者はとらえたのであろう。「その死生観」と指示している。死生観の意味するところは明確ではない。その言を引いて筆者がとらえる死生観があつて、その一方で、ポルトガルの宣教師の死生観があつて、辞書に掲載する、その理由の推測を説明した。

例5 アカデミー賞は主にハリウッドの映画関係者によって選ばれるという。

この例文では「米アカデミー賞外国語映画賞」と述べている前段の表現を受けて引用している「アカデミー賞」であるから、そのなかの外国語映画賞を指していることになるが、アカデミー賞を「～は～という」の形式で一般的な説明を加えて展開している。

例6 しかし常に国境を越えた世界相手の映像作りに挑む映画人からの高い評価はまた格別であろう。

この例文では「高い評価」と「格別（の評価）」が同じものとして表現されている。その評価は「常に国境を越えた世界相手の映像作りに挑む映画人から」与えられたものだからである。

例7 同じようなことは、お家芸のアニメ「つみきのいえ」で短編アニメーション賞を初受賞した加藤久生夫監督にもいえるに違いない。

同じアカデミー賞映画賞をアニメ映画部門で受けることになり、「邦画ダブル受賞」とニュース報道された。その出来事を指示して引用説明をしている。

例8 「映画は言葉を超越ることを実感した」という滝田監督。

この例文は、監督の言葉として会話符号で示されている。本来、「映画が言葉を超越る」という表現は、この映画受賞の事実をとらえて、これまでの日本映画が果しえなかったことをこの映画が成し遂げた、その様子を語ったものとなる。しかし、これまでの映画は多く、言葉の壁を超越るだけでなく、文化を超越て人々に受け入れられている。

監督の言葉は、改めてその実感をもったという風に受け止めることができるだろう。

例9 その映像にひそむパワーを世界に向けて解き放つのは、作り手の「獨創性」であることを改めて示してくれた両受賞作だった。

解き放つもの、それは、獨創性にある、としたうえで、この「は」の表現には、解き放

つものは作り手の獨創性であること、それを証明した受賞作品であることをいう。この例文9は次のように解析されよう。

[[[その映像にひそむ[パワー]]を[[世界に向けて]解き放つ]の]は、[[[作り手の「獨創性」である]こと]を改めて示してくれた][両受賞作だった]。]

以上のように、この例題においては、単位文における「～は」の語法は、まず文章における話題の提示に始まっている。「～とは」を用いて、語を措定し、「～である」と解説する。その解説にある語句に話題の内容が焦点となり、その語句を受けて文を連続している。その語句が持つ文化的な背景にある概念を捉えて、言葉を紹介し、それが話題と結びつくことを提示した。

文章の内容は、その話題が最近の出来事に結びつき、そのニュースを説明する。「～は～という」引用の言語は単位文に、話題についての説明を内容とする構成となって、文章にさらに文章の世界を重ね合わせる表現となり、いわば複文章となる用法がある。文と文の関係が、語を指示して、語を受けていく関係を持つことは、指示などの働きにわかりよい。

文が複数に連なって文章の意味を構成すると、文章は段落となり、段落と段落相互の関係もまた生じる。そこに「～は」は、語を受けるが、その後の持つ意味内容を文章の内容を背景にもつものとなって展開する。段落に分けると、形式では6段落である。文章の構成を、第1と第2を導入部分とみて、第3と第4で本題の内容を展開し、第5と第6で意見または感想となって結びの部分となる。

あるいは、起筆、承筆、転筆、結筆と分けるなら、第1、第2第3、第4第5、第6となるだろう。

段落に応じてみていくと、引用とした「は」の語法が説明できる。

おわりに

語法に分析した助辞「は」の形態を見ると、助辞を伴った形式が語となり、品詞として句または文のなかで職能を得ていく。その語と語において、その関係構成が句を作り、文を作っていくことがわかる。資料に取り上げた文章は、格概念を未分化のまま、助辞「は」を伴った語が、文または文章の主語として働く。それは、文題とするものである。

しかし、現代語の文章の分析では明らかに、主格が主語としてとらえられるので、日本語は論理関係をより分出する形式で表現されるようになったと言える。それは、日本語が新たに外国語を学んでいるからである。これから、さらに形態から統語の現象へと、文法議論を進めなければならないが、文と文章のレベルを見ていくことになる。。

形態は語を明示するが、語が品詞となって文の中だけで働くとする、やはり助辞「は」の分析による形態は、文章で句や文を複雑化するように働くと思わなければならないだろう。

注1) 本稿は「日本語助辞『は』の本質(一)」(『言語文化』16号、愛知淑徳大学言語コミュニケーション学会、2008年3月20日)に続く。また、2008年11月29日に行われた、言語コミュニケーション学会第9回研究大会(於愛知淑徳大学)、筆者発表「日本語助辞『は』の本質と職能」がある。

2) 日本語文法形態論は学説が、いくつかある。現代語文法として理論の枠組みを捉えることができる宮地説を筆者は学んだ。宮地裕『新版 文論』明治書院など、論考による。

3) 野田尚史『「は」と「が」』新日本語文法選書1、くろしお出版、1996年11月1日、154-168ページ。

4) 丹羽哲也『日本語の題目文』研究叢書340、和泉書院、2006年1月25日、243-288ページ。

5) 豊地正枝『「XはYが+述語形容詞」構文の認知論的意味分析—「花は桜がいい」構文の意味分析を中心に—』、慧文社、2004年6月7日。

6) 三澤薫生編著『谷川士清自筆本 倭訓栞 影印・研究・索引』勉誠出版、2008年12月10日。

『倭訓栞』の編纂は『日本書紀通証』の訓義を発展、補充する目的で開始された。全体を前編・中編・後編の三部に分ち、前編四十五卷三十四冊、中編三十卷三十冊、後編十八卷十八冊、計九十三卷 八十二冊から成る浩瀚な辞書で、最終刊行までに実に百十年を要して完成した。(中略) このたび影印刊行する石水博物館所蔵の谷川士清自筆本は、この『倭訓栞』の原点を明らかにすることのできる極めて貴重な資料である。『倭訓栞』の稿本が『日本書紀通証』のそれと共に「反古冢」に埋められた事実をもってすれば、本書の存在が『倭訓栞』成立の過程を知る上において、また国語学史研究において、どれほど価値あるものであるかは贅言を要すまでもないことである。(三澤薫生「序言」より)

7) 『増補語林 倭訓栞』(皇典講究所印刷部、明治31年7月15日)がウェブサイトで公開されている。「日本語の歴史と日本語研究の歴史」、岡島昭浩氏による。本稿は、このウェブサイトの画像と岡島氏による翻刻のブログに学恩を得た。記して謝意を申し上げる。

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/~okajima/index0.html>

8) 出典は、注7による。「大綱」について、以下に引用した用例は、そのページ数に従った。文段の通し番号は、前文を含めて総数166とした。

9) 助辞「は」の形態で、活用する語につく形式としての場合が、名詞を構成する形式と文法的な扱いが同じであるかどうかということについて、今後の検討を要する。

10) 日本語助辞「は」の語法解として、南京師範大学外国語学院にて大学院集中講義を2009年2月27日に行った。言語学講座としての講義である。

11) 「余録」、2009年2月24日付け毎日新聞朝刊。